『琴歌譜』十一月節「歌返」
―「御井の上に植ゑつや」を中心に―

福原 佐知子

一　はじめに

琴歌譜「歌返」は、一番歌「茲都歌」に続く二番歌である。「歌返」も十一月節（新嘗・大嘗）の歌謡であり、十一月節にふさわしい内容になっていると考えられる。[1] また、「歌返」は、三つの縁記を有している（便宜上、縁記Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとする）。縁記Ⅰは歌譜の前に、ⅡとⅢは歌譜の後に置かれており、縁記Ⅰが正統の縁記であることを物語る。そして、歌譜の前に置かれている縁記は、天皇の作歌（天皇御製）である。[2] その縁記Ⅰは、仁徳天皇（大鷦鷯天皇）が八田皇女を召し入れて、その姫を恋しく思われて、平群と八田山との間でこの歌をお作りになったというものである。「歌返」は、恋歌として理解されていたことがわかる。次に「歌返」の歌詞、縁記、譜歌詞をあげる。[3]

歌返　　之万久尓乃　安波知乃美波良乃之乃　佐祢己自尓
伊己之毛知支天　安佐川万乃　美為乃宇へ尓　宇恵川也
安波知乃美波良乃之乃
（島国の　淡路の三原の小竹　さ根掘じに　い掘じ持ち
来て　朝妻の　御井の上に　植ゑつや　淡路の三原の
小竹）

難波高津宮御宇大鷦鷯天皇、納二八田皇女一為レ妃。于レ時皇后聞大恨。故天皇久不レ幸二八田皇女所一。仍以恋二思若姫一之、於下平群与二八田山一之間上、作二是歌一者。今校、不レ接二於日本古事記一。　〈縁記Ⅰ〉

（難波高津宮に天の下治らしめしし大鷦鷯天皇、八田皇女を納れて妃としたまふ。時に皇后聞きて大きに恨みたまふ。故天皇久しく八田皇女の所に幸さず。仍りて

若姫を恋ひ思ほして、平群と八田山との間にして、是の歌を作りたまひきといへり。今校ふるに、日本（紀）古事記に接せず）

茲万久尓乃　安波遅乃應美波良乃志乃　詩也　佐祢己自伊尓伊　之也　佐祢己自伊尓伊　佐祢己自伊尓伊　也伊己自毛於知支弖　之也　安佐豆万阿乃於　之也　安佐豆万乃於　安佐豆万安乃於　美為乃應宇倍尓　宇恵亜亜川宇宇　夜　安波遅伊伊乃於美波良乃於之乃　宇恵亜豆宇之伊乃　安波遅伊伊乃美波良乃之乃　宇恵亜都宇宇茲伊怒　之能於於應　宇宇會亜都宇志伊能於　之伊怒於於　宇會亜都宇志伊乃於　茲能於於　※琴歌と声譜は省略する

一説云、皇后息長帯日女、越二那羅山一望二見葛城一作歌者。〈縁記Ⅱ〉

（一説に云く、皇后息長帯日女、那羅山を越えて葛城を望み見たまひて作りたまへる歌といへり）

一古事記云、誉田天皇遊二猟淡路島一時之人歌者。〈縁記Ⅲ〉

（一古事記に云く、誉田天皇、淡路島に遊猟したまひし時の人の歌といへり）

「歌返」の歌謡について、先行研究は「女性を小竹にたとえたもの」[4]とするが、なぜ御井に小竹を植えることが恋歌になるのか、その縁記との関係を論じたものはない。十一月節には、貞観儀式や延喜式によれば、神膳のための重要な御井が掘られ、造酒童女という選ばれた女性が奉仕する。琴歌譜「歌返」の縁記が恋歌であることを伝え、「淡路の三原の小竹」を歌うことは、十一月節において、御井に仕える娘子のことを考える必要があるのではないか。

また、先行研究は、反正天皇の産湯となった淡路の三原の瑞井の小竹を、水神の座として移植した[5]とするが、縁記が伝える恋歌の解釈をしていない。

歌詞では「あはぢのみはらのしの」のみが二回詠まれ、歌譜では「うゑつしの」が四回（このうち「うゑつ（や）」は五回、「しの」は十回）歌われている。これによると、「あはぢのみはらのしの」と「うゑつしの」が歌の中心になっており、「偲ふ恋の対象である淡路御原皇女を御井に得た」ということであると考える。本稿では、「歌返」が恋歌として、十一月節（新嘗・大嘗）にどのように関わっているのかを論じる。

二　「歌返」の縁記と歌謡―小竹と恋歌

なぜ「歌返」の歌謡を恋歌として伝えるのだろうか。先行研

究は、「小竹に譬えた淡路の三原の娘子を朝妻に移し住まわせた」とする（上代日本文学講座、上代歌謡詳解、記紀歌謡集全講、琴歌譜新論）。また、上代歌謡詳解は「古事記では八田若郎女を「八田の一本菅」と詠まれている。これは若しかすると淡路の三原姫といふやうな方について八田若郎女の事柄に似たやうな話があったのかも知れない」[6]と述べる（八田皇女は日本書紀の記載で、古事記では八田若郎女）。その八田若郎女を「一本菅」に譬えた歌謡が、仁徳天皇と大后石之日売命（日本書紀では皇后磐之媛命）の「志都歌の歌返」六首の、すぐ後にある。

天皇、八田若郎女に恋ひて、御歌を賜ひ遣りき。其の歌に曰はく、

八田の　一本菅は　子持たず　立ちか荒れなむ　惜ら菅
原　言をこそ　菅原と言はめ　惜ら清し女　（記六四）

爾くして、八田若郎女、答ふる歌に曰はく、

八田の　一本菅は　一人居りとも　大君し　良しと聞こさば　一人居りとも　（記六五）

古事記には「天皇、八田若郎女に恋ひて、御歌を賜ひ遣りき」とあるが、琴歌譜「歌返」の縁記には「若姫を恋ひ思ほして、平群と八田山との間にして、是の歌を作りたまひき」とある。八田皇女を、古事記では「一本菅」に譬え、琴歌譜では「小竹」に譬えているのである。以下、琴歌譜の縁記に依って、日本書紀の表記の、八田皇女、磐之媛とする。

「小竹」は、記紀には、「手草結二天香具山之小竹葉一而、〈訓二小竹一云二佐々一。〉」（記神代）、「号二清之湯山主三名狭漏彦八嶋篠一。……篠、小竹也。此云二斯奴一。」（神代上第八段一書第一）とあり、ササ・シノ両様の訓注がある。新撰字鏡は「簜」を「竹也、細竹也、篠也、志乃、又保曾太介」とし、「細竹」もシノとする。シノは現在、真竹や男竹に対して、篠竹や女竹と呼ばれている。女性的な細いしなやかな竹であり、川辺によく生えている篠笛に使われる竹である。

そして、琴歌譜新論は「女性をすすきや菅に比喩することは万葉集中にもまた多く見られる」として、小竹を女性の比喩としている万葉歌に、7・一二二、7・一二七六、7・一三四九、7・一三五〇をあげているが[7]、管見では、小竹そのものを女性として表している例は少なく、次の三例が考えられる。

如是為而也　尚哉将老　三雪零　大荒木野之　小竹尓不有
有九二（7・一三四九）

淡海之哉　八橋乃小竹乎　不造笑而　信有得哉　恋敷鬼呼
（7・一三五〇）

近江路の　篠の小蕗　早引かず　子持　待ち痩せぬらむ

篠の小蕗や　さきむだちや（催馬楽「逢路」一九）

それよりも、臼田甚五郎氏が催馬楽「逢路」の訳注に「篠には「忍ぶ」にかけて、ひそかにこもるような気持が寄せられているかもしれない」[8]と述べているが、次にあげる万葉集11・二四七八や11・二七五四が、シノの類音によってかけ、シノフ目の寓意になっている。[9]

秋柏　潤和川辺之　細竹目　人不顔面　公無勝（11・二四七八）

朝柏　閏八河辺之　小竹之眼笑　思而宿者　夢所見来（11・二七五四）

さらに、小竹が恋歌に詠まれる傾向にあると考えられる。

妹等所　我通路　細竹為酢寸　我通　靡細竹原（7・一一二一）

池辺小槻下　細竹苅嫌　其谷　公形見尓　監乍将偲（7・一一二七六）

小竹之上尓　来居而鳴鳥　目乎安見　人妻妬尓　吾恋二来（12・三〇九三）

また、「小竹」の用字によって、次の例のように、恋偲ふ気持ちとかけている。

山越乃　風乎時自見　寝夜不落　家在乎　懸而小竹櫃（1・六）

三越道之　雪零山乎　将越日者　留有吾乎　懸而小竹葉背（9・一七八六）

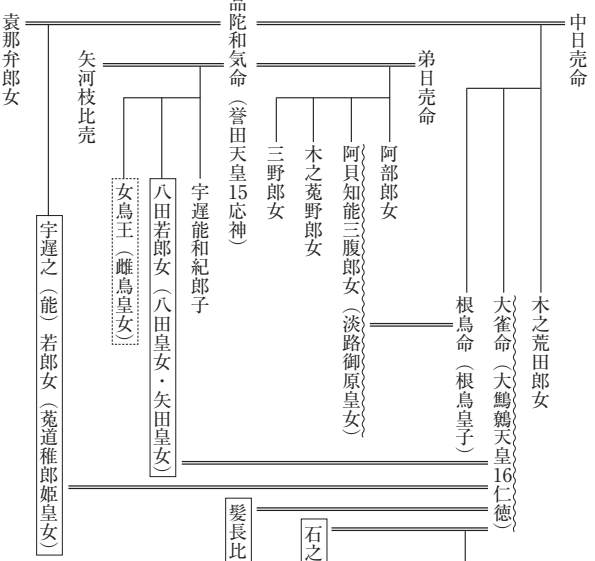
従古　言継来口　恋為者　不安物登　玉緒之　継而者雖云　処女等之　心乎胡粉　其将知　因之無者　夏麻引　命方貯　借薦之　心文小竹荷　人不知　本名曾恋流　気之緒丹四天（13・三二五五）

これらのように琴歌譜「歌返」の小竹も、恋偲ふ気持ちと、恋偲ふ女性を表しているように受け取れる。

「淡路の三原の小竹」については、記紀歌謡集全講が「応神天皇の妃弟媛の所生に淡路の御原の皇女がある」[10]と述べているように、応神天皇二年三月に、淡路御原皇女（記では阿貝知能三腹郎女）が見られる。上代歌謡詳解[11]や、琴歌譜新論が指摘するところだが、[12]仁徳天皇と淡路御原皇女との恋愛伝承が、仁徳天皇と八田皇女の恋愛伝承に転位吸収されたことが考えられる。次節で述べるが、淡路御原皇女は八田皇女と異母姉妹であり、仁徳天皇とは八田皇女とともに異母妹にあたるからである。八田皇女が「八田の一本菅」と歌われているように、「淡路の三原の小竹」は淡路御原皇女のことであり、恋しい淡路御原皇女を朝妻の御井に得たというのである。

三　朝妻の御井の上に植ゑつや

淡路御原皇女は、応神天皇二年三月に「又妃（またのみめ）、皇后の弟弟姫、淡路御原皇女（あはぢのみはらのひめみこ）を生む」とあり、応神記では「阿貝知能三腹郎女（あはぢのみはらのいらつめ）」と見え、「根鳥王（ねとりのみこ）、庶妹三腹郎女（ままいもみはらのいらつめ）を娶りて、生みし子は、中日子王（なかつひこのみこ）。次に、伊和島王（いわしまのみこ）〈二柱（ふたはしら）〉」とある。古事記をもとに作成した系図を次にあげる。



※括弧内は日本書紀の表記名。□は仁徳天皇妃。

系図を見ると、仁徳天皇にとって淡路御原皇女、八田皇女は異母妹になる。また、古事記には、仁徳天皇は皇后磐之媛のほかに、髪長媛、八田皇女、菟道稚郎姫皇女を娶り、雌鳥皇女を妃にしようとしたとある。これら八田皇女、菟道稚郎姫皇女、雌鳥皇女も異母姉妹なので、異母妹の淡路御原皇女と仁徳天皇の間にも恋歌の伝承があり、「歌返」を歌ったことが考えられる。

「朝妻」は、現在の奈良県御所市朝妻で金剛山東麓にあり、「志都歌の歌返」にも「葛城高宮我家の辺」（記五八、※紀五四にもある）、「朝妻の避箇の小坂を」（紀五〇）と歌われているように、磐之媛の故郷である。また、仁徳天皇と磐之媛の皇子である允恭天皇の名にも「男浅津間若子宿祢命（王）」（記）、「雄朝津間稚子宿祢天皇」（紀）としてアサヅマが付けられている。

ここで注目するべきは、「志都歌の歌返」という歌曲七首はすべて仁徳記にあり、そのうち六首（記五七、五八、五九、六〇、六一、六三）が、八田若郎女をめぐる仁徳天皇と磐之媛の問答歌になっていることである。同様に、日本書紀の仁徳天皇三十年九月から十一月にも「志都歌の歌返」に類似する一連の歌謡（紀五三、五四、五七、五八）があり、記紀ともに、磐之媛が新嘗の御綱柏を取りに行く場面になっている。[13] 琴歌譜「歌返」は、記紀の、八田皇女をめぐる仁徳天皇と皇后磐之媛の物語が背景にあるものの、歌謡は、琴歌譜独自のものである。ただ、前節にも挙げたように、古事記の「志都歌の歌返」の後に「天皇、恋二八田若郎女一、賜二遣御歌一」として、八田皇女を「一本菅」にたとえている（記六四、六五）ことと、日本書紀の「志都歌の歌返」に類似する場面の直前に、「八田皇女と並んで皇后でいたいとは思わない」という、仁徳天皇と磐之媛の問答歌（紀四六、四七、四八、四九、五〇）が、琴歌譜「歌返」の歌謡の背景を物語っている。その仁徳天皇二十二年の記事をあげる。

二十二年の春正月に、天皇、皇后に語りて曰はく、「八田皇女を納れて妃とせむ」とのたまふ。時に皇后聴したまはず。爰に天皇、歌して皇后に乞はして曰はく、

貴人の　立つる言立　儲弦　絶間継がむに　並べてもがも（紀四六）

とのたまふ。皇后、答歌して曰したまはく、

衣こそ　二重も良き　さ夜床を　並べむ君は　畏きろかも（紀四七）

とまをしたまふ。天皇、又歌して曰はく、

おしてる　難波の崎の　並び浜　並べむとこそ　その子は有りけめ（紀四八）

とのたまふ。皇后、答歌して曰したまはく、

夏虫の　蛾の衣　二重着て　かくみやだりは　豈良くも
あらず（紀四九）

とまをしたまふ。天皇、又歌して曰はく、

朝妻の　避箇の小坂を　片泣きに　道行く者も　偶ひて
ぞ良き（紀五〇）

皇后、遂に聴さじと謂し、故、黙して亦　答　言したまはず。

とある。そして、この後、三十年九月から十一月に、志都歌の歌返に類似する一連の歌謡があり、そのすぐ後に、

時に皇后、奏さしめて言したまはく、「陛下、八田皇女を納れて妃としたまふ。其れ、皇女に副ひて后為らまく欲せず」とまをしたまひ、遂に奉見えたまはず。車駕、宮に還りたまふ。天皇、是に皇后の大きに忿りたまふことを恨みたまへども、而も猶し恋ひ思すこと有します。

とある。仁徳天皇が八田皇女を磐之媛とともに並べ置きたいと言うのに対して、磐之媛は真っ向から否定する。にもかかわらず、仁徳天皇は、八田皇女を妃にしたのである。これが、琴歌譜「歌返」の、磐之媛の故郷である葛城高宮「朝妻」に、八田皇女を表す「小竹」を持ってきて植えた、つまり、八田皇女を並べ置いたことを意味する。

琴歌譜「歌返」の歌謡は、前の系図で示したように、八田皇女と異母姉妹である淡路御原皇女の恋愛伝承が、有名な八田皇女の伝承に吸収され置き換えられたと考えられる。また、「御井」は、十一月節に重要であり、その御井に、淡路御原皇女に象徴される「淡路の三原の小竹」を持ってきて植え付けたというのである。

井の傍には樹木や植物が植えられていたことが、「桜井」（光仁紀歌謡）、「藤井」（1・五二）、「榎の葉井」（催馬楽）のほか、「寺井の上の堅香子の花」（19・四一四三）、「天皇、井の傍の桜の華を見して、歌して曰はく」（允恭紀八年二月）、「駒手の御井。難波の高津の宮の天皇の御世に、楠、井の上に生ひたりき」（播磨国風土記逸文）や、記紀の海神の国訪問の段に「魚鱗の如く造れる宮室、其綿津見神の宮ぞ。其の神の御門に到らば、傍の井上に湯津香木有らむ」（記上巻・海神の国訪問）、「門前に一の井有り。井上に一の湯津社樹有り。枝葉扶疏し」（神代下〔第十段〕正文）、「一夜の間に、萩一根生ふ。高さ一丈許りなり。仍りて萩原と名づく。すなはち御井を闢きたまふ。故れ、針間井と云ふ。」（播磨国風土記・揖保の郡）などからわかる。

「歌返」では「さ根掘じに　い掘じ持ち来て」と歌われるが、記紀などに、神の依代として祭る例がある。

天の香具山の五百津真賢木を、根こじにこじて、上つ枝に

八尺の勾璁の五百津の御すまるの玉を取り著け、中つ枝に八尺の鏡を取り繋け、下つ枝に白丹寸手・青丹寸手を取り垂でて……（記神代）

乃ち丹生の川上の五百箇真坂樹を抜取にして、諸神を祭りたまふ。（神武即位前紀）

天香山の五百箇の真賢木を掘じて、〔古語に、佐禰居自能禰居自といふ。〕上枝には玉を懸け、中枝には鏡を懸け、下枝には青和幣・白和幣を懸け、太玉命をして捧げ持ち称賛さしむ。亦、天児屋命をして相副に祈禱らしむ。(14)（古語拾遺）

小竹は、忌竹としても使われる。地鎮祭や御田植えの苗代の四隅に竹を立ててしめ縄を張ったり、大嘗祭の斎田の周囲に等間隔に竹を立ててしめ縄を巡らせるのは、その中にあるものを清浄化するためである。賢木（榊）と同様に、小竹（篠）は神楽歌の採物に歌われる神聖なものの象徴でもある。

琴歌譜「歌返」では、十一月節（新嘗・大嘗）にとって大事な御井に、小竹を根ごと植え付け、その御井を清らかにしたのである。そして、小竹に象徴される神聖な女性は、十一月節にとって必要不可欠な御井に、重要な役割を担う。

四　井と女性と酒造り

「歌返」では、淡路の三原の小竹を御井に植えたことを歌うが、井と娘子との関わりが深いことは、女性の水汲みなどの役割から、万葉集にも井に奉仕する娘子が詠まれている。

藤原宮の御井の歌

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子　荒たへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて　埴安の　堤の上に　あり立たし　見したまへば……高知るや　天の御陰　天知るや　日の御陰の　水こそば　常にあらめ　御井の清水（1・五二）

短歌

藤原の　大宮仕へ　生れつくや　娘子がともは　ともしきろかも（1・五三）

葛飾の　真間の井を見れば　立ち平し　水汲ましけむ手児名し思ほゆ（9・一八〇八）

人皆の　言は絶ゆとも　埴科の　石井の手児が　言な絶えそね（14・三三九八）

鈴が音の　駅家の　堤井の　水を飲へな　妹が直手よ（14・三四三九）

これらは単なる水汲みの娘子というよりは、「藤原宮の御井に仕える娘子」、「真間の井の手児名」、「石井の手児」、「駅家の堤井の妹」というように、その井水に奉仕する娘子として詠まれているようである。

また、万葉集に、娘子が酒を醸む例がある。

味飯を　水に醸みなし　我が待ちし　かひはかつてなし
直にしあらねば（16・三八一〇）

丹後国風土記逸文「比治の真奈井奈具の社」には、天女が井に天降り、上手く酒を造り、この酒を一杯飲むと万病が治癒するとある。

……この里の比治の山の頂に井あり。その名を麻奈井と云ふ。今は既に沼と成れり。この井に天つ女八人降り来て浴水む。時に老夫婦あり。その名を和奈佐老夫・和奈佐老婦と曰ふ。この老らこの井に至り、窃かに天つ女一人の衣と裳を取蔵しつ。即ち衣と裳あるは皆天に飛び上がり、ただ衣も裳もなき女娘一人留まりぬ。身を水に隠して独懐愧ぢ居り。ここに老夫、天つ女に謂りて曰はく「吾に児なし、謂はくは天つ女娘、汝、児とならむや」といふ。……ここに天つ女、善く酒を醸せり。一坏飲めば吉く万の病除かる。

日本書紀には、神吾田鹿葦津姫が酒を醸みて新嘗を行ったとある。

時に神吾田鹿葦津姫、卜定田を以ちて号けて狭名田と曰ふ。其の田の稲を以ちて、天甜酒を醸みて嘗す。又淳浪田の稲を用ちて、飯に為きて嘗す。（神代下第九段一書第三）

このように井水に奉仕する娘子、酒を醸む娘子は、十一月節においても見られる。貞観儀式[15]「践祚大嘗祭儀」によると、京都北野の斎場には、御井と童女井[16]が掘られるが、この御井の水から、造酒童女などの選ばれた女性らが神膳となる黒酒白酒を醸すのである。八月に、

次卜定物部人十五人〈男六人女九人〉、造酒童女一人〈以二当郡大少領女未レ嫁卜食充レ之。神語佐可都古〉、稲実公一人、大酒波一人、大多米酒波一人、粉走二人、相作四人、焼灰一人、採薪四人、歌人廿人歌女廿人〈歌人歌女並不レ卜〉。（儀式巻第二）

とあり、造酒童女〈神語にサカツコという〉は、悠紀・主基国の斎郡の大領・少領の娘で未婚の女性である（延喜式では造酒児）。大酒波、大多米酒波、粉走、相作も造酒童女に協力して醸造に従う女性である（延喜式に「已上はみな女」とある）。そして、九月中旬に、悠紀・主基国の斎田で抜穂の儀が行われる。

至二御田一抜二取御稲一。造酒童女先レ之。稲実公次レ之。酒波次レ之。……就レ中以二先抜四束一別納二高萱御倉一。自余為二白黒二酒料一。（儀式巻第二）

とあり、神膳の御飯や御酒となる斎田の稲穂は、まず造酒童女から抜取るのである。そして、十月上旬に、

次各祢宜卜部郡司等率二造酒童女物部人六人工一人夫十人一始堀二斎場御井童女井一。于時童女先執二斎鉏一堀二御井一。次祢宜執レ鉏堀二童女井一。……次各抜穂御稲并雑物遷二納内院一。次始各舂二御稲一。造酒童女先レ之（大酒波仕女等終レ之）。次始各醸二小斎院御酒一。（儀式巻第三）

とあり、京の斎場には、神膳の調理に必要な水を用意するための御井が造酒童女によって掘られ、祢宜が造酒童女のための童女井を掘る。そして、造酒童女が最初に御稲を舂き、小斎院御酒を醸し始め、十一月上旬には「始醸二内院御酒一」とある。延喜式「践祚大嘗祭」酒米事条[17]にも、

凡舂二黒白酒料米一者、造酒児先下レ手、次諸女共舂、訖祭二井神一、次祭二竈神一

とあるように、神膳の黒酒白酒の醸造が、最初に造酒童女が手を下して始まるのである。そして、大嘗祭卯日に大嘗宮へ運送する時には、

悠紀主基共発レ自二斎場一詣二大嘗宮一。……次造酒童女一人〈着二細布明衣日蔭鬘一、乗二白木輿一。夫四人擔レ之〉次御稲輿一基〈納二布袋一、居二黒木輿一。擔丁四人〉……次黒酒二瓶〈各納二一石五斗一。載二六角黒木輿一。飾二以蘿葛一。擔丁各八人〉次白酒二瓶〈装束并部領擔丁同二黒酒一〉……次御水六瓶〈用二斎場御井水一。居二六角黒木輿一。飾以二黄木葉一。其上挿二蒜匏一。擔丁廿四人。已上並置供神物皆挿二賢木一〉（儀式巻第三）

とあり、造酒童女だけが御稲や黒酒白酒と同様に、御輿に乗って運ばれる。その後に、

造酒童女先舂二御飯稲一、次酒波等共不レ易レ手且舂且歌〈歌詞当時制レ之〉（儀式巻第三）

とあり、造酒童女がまず稲を舂き、次に酒波らと共に稲を舂きながら歌を歌う。このように、十一月節において、造酒童女は稲穂を抜くことから稲穂を用いての醸造・調理まで、すべてに関わっているのである。

五　大嘗祭と井

「歌返」の御井に植えられる「淡路の三原の小竹」は、淡路

御原皇女を表し、十一月節においては、酒造りを行う造酒童女を象徴する。十一月節（新嘗・大嘗）に、天皇は今年の特別な稲穂から造られた黒酒白酒と御飯を召し上がり、新たな活力を身につけ、そして来年の稲の実りを願うのである。これらの黒酒白酒を醸し、御飯を炊くための御井の水は、とりわけ重要なものであったと考えられる。

十一月節（新嘗・大嘗）には、京都北野の斎場に、黒酒白酒をつくるための御井が掘られるが、貞観儀式（巻第二）によると、京都北野の斎場で「次卜二定御井所一〈方一丈二尺若當處舊井卜食者即使二修理用一レ之一〉」とあり、場所は「御井在二院外東北角荒見川東一童女井在二其東一」とある。

大嘗祭の井について、井口樹生氏が、悠紀・主基国斎場の「掘二井一処一〈蓋以二片屋一〉」（延喜式）と、京都北野の斎場の「其井二処。卜訖御井者造酒児始掘。造酒児者、稲美卜部始掘。」（延喜式）をあげる[18]。実際には、北野斎場から大嘗宮に移動する悠紀・主基の群行の中に「次御水六甁〈用二斎場御井水一〉」（貞観儀式）とあり、北野斎場の御井の水が使用されたのだが、その水は悠紀・主基国の御井の水と同じであるという約束があったものと思われると述べ、次の大嘗会和歌をあげる。

後冷泉院の大嘗会（西暦一〇四五）の主基方備中国の、

同じ国いな井といふ所を人にかはりてよめる　高橋明頼

苗代の水はいな井にまかせたり民やすげなる君が御代かな

（金葉集賀歌三一九）

建久九年（一一九八）土御門天皇大嘗会の、

同じ大嘗会主基屏風に六月松井　権中納言資実

ときはなる松井の水を結ぶ手のしづくごとにぞ千代は見える

（新古今集賀歌七五六）

井口氏は、田に水を供給する井や、悠紀・主基の御井から運ばれた聖水であることを言う[19]。しかし、琴歌譜「歌返」に歌われる御井は、縁記や歌謡にも、水のことや田や稲のことは言われていない。

貞観儀式、延喜式を見る限り、悠紀・主基国の斎場の水を、京都北野の斎場や大嘗宮に運んだ記事は見られない。大嘗宮へは京都斎場の御井の水が運ばれる（「御水六甁〈用二斎場御井水一〉」儀式巻第二）。その「御水六甁」の割注に「供神物」とあり、延喜式にも割注に「神御物」（「已上並神御物。皆挿二賢木一」延喜式巻七、践祚大嘗祭）とあるので、御井の水は神膳のためのものであり、御飯の調理にも使われたと思われる。大嘗会和歌の例は、貞観儀式や延喜式の成立年よりもだいぶ後に

なり、御井の意味合いも違っているのではないだろうか。

琴歌譜「歌返」の御井は、貞観儀式、延喜式に見られるように、十一月節の神膳の黒酒白酒を醸造する水のほか、供神物として神膳の御飯を炊く水などを得るための井であると考えられる。そして、十一月節において重要な井水は、京都北野の御井の水であり、この御井のことは前にあげたように、造酒童女が掘るなど詳しく書かれている。卯日当日、御飯を除く神膳（神膳の御飯は大嘗宮に到着後、造酒童女らが稲を舂き調理される）、黒酒白酒、そして大多米酒はこの御井の水から醸され、御贄が調備されて、大嘗宮へ運ばれていくのである。

一方、悠紀・主基国の斎場の井については、貞観儀式には記載がなく、延喜式に「掘二井一処一〈蓋以二片屋一〉」とのみある。この悠紀・主基国に一か所づつ掘られる井は、稲だけでなく、そこで一か月宿直する抜穂使や斎場の雑色人らの生活用水にも使われたと考えられる。同様に、大嘗宮の近くに、天皇の食膳と、小斎官人の致斎の期間中の斎食を準備する小忌食院[20]が造られるが、そこにも延喜式に「掘二井一処一」とある。この井も悠紀・主基国の井と同様に貞観儀式には記載されていない。小忌食院の井は斎食の調理に必要な水を調達するためのものであり、北野斎場の御井の水から造られる神膳のための黒酒白酒や、供神物のための水とは区別されている。

六　まとめ

琴歌譜十一月節「歌返」は、記紀にも有名な磐之媛の嫉妬に関わる仁徳天皇の、八田皇女への恋歌として縁記が伝えているように、「恋しい女性を大事な御井に得た」という意味の恋歌である。仁徳天皇が恋偲ふ女性を「小竹」に譬えたのである。「朝妻」は、磐之媛の住居があり、仁徳天皇と磐之媛に縁の深い場所でもあり、そこに淡路御原皇女を御井の守りとして住まわせたということになるであろう。

十一月節（新嘗・大嘗）は、天皇が新穀の御飯と黒酒白酒を召し上がることによって、新たに再生復活をし、来年の豊作祈願をする儀式である。それらの供神物（神膳）となる御井の聖水は、天皇の再生復活のために不可欠のものである。琴歌譜「歌返」では、その大事な御井に、恋偲ふ女性である淡路御原皇女を得られたことを歌うのである。御井に植えられた「淡路の三原の小竹」は、御井に得た淡路御原皇女を表し、十一月節（新嘗・大嘗）においては酒造りなどを行う、重要な御井に奉仕する造酒童女を示唆するものとなっている。

〈注〉

（1）琴歌譜には十一月節、元日、七日、十六日の四節に歌謡が配置されている。「十一月節」という記載が無いが、正月元日の「長埴安扶理」の後に、「自余小歌同十一月節」とあることによって、「茲都歌」以下十二曲は、十一月節の歌謡だと理解できる。

（2）琴歌譜の縁記は次のように配置されている。

①縁記Ⅰ②縁記Ⅱ③縁記Ⅲに記載される作歌者

歌曲名	歌譜の前	歌譜の後
「茲都歌」		①赤猪子 ②（弥麻貴入日子天皇皇子）垂仁天皇
「歌返」	①仁徳天皇	②皇后息長帯日女　③時之人
「余美歌」	①景行天皇	
「宇吉歌」	①雄略天皇　②韓日女	
「阿遊陁扶理」	①景行天皇	
「酒座歌二」		①皇太后（息長足日咩天皇）
「茲良宜歌」		①木梨軽皇子　②允恭天皇

琴歌譜の縁記については、また別の機会にあらためて論じることにしたい。

（3）琴歌譜の原文は『古楽古歌謡集』（陽明叢書国書篇第八輯、思文閣出版、一九七八年）による。縁記の訓読は、神野富一・武部智子・田中裕恵・福原佐知子『琴歌譜歌謡稿（一）』（『甲南国文』第四三号、一九九六年）による。ただし一部改めたところもある。

（4）佐佐木信綱『上代日本文学講座』（春陽堂、一九三三年）、木本通房『上代歌謡詳解』（武蔵野書院、一九四二年）、武田祐吉『記紀歌謡集全講』（明治書院、一九五六年）、賀古明『琴歌譜新論』（風間書房、一九八五年）

（5）賀古明、前掲書「三、「歌返」の歌」、井口樹生「大嘗祭と歌謡及び和歌―『琴歌譜』十一月節を中心に―」（『藝文研究』六五、一九九三年）

賀古氏は反正即位前紀をあげる。

天皇初生二于淡路宮一。生而歯如二一骨一、容姿美麗。於レ是有レ井、曰二瑞井一。則汲之洗二太子一。時多遅花落有二于井中一。因為二太子名一也。多遅花者今虎杖花也。故称謂二多遅比瑞歯別天皇一。

この反正天皇が産湯に使った瑞井が淡路島の三原に伝えられ、「産宮」とよんで、安産を祈る社が建てられてもいることを述べる。その上で、

御食つ国として関心深い淡路島の、三原の聖浄水の神威が移りこもる「小竹」を水神の座として移植することに

よって、朝妻の御井の水に、より豊かな神威を加え得たことをよろこび祝福する心情を歌いあげている歌謡、結局、神威讃嘆の声として歌われた、神事民謡としての本質である。

と結んでいる。井口氏は、新撰姓氏録の右京神別下「丹比宿祢」にも反正天皇の産湯の井の伝承があることをあげ、大嘗祭の天子再生復活の儀式にふさわしいとする。

なぜに篠を移植したのかと言えば、それは朝妻の御井に淡路の瑞井と同じ聖水の資格を与えんがためだったと解せる。

とする。

（6）木本通房『上代歌謡詳解』（武蔵野書院、一九四二年）、一五四頁

（7）賀古明、前掲書、一一四～一一五頁。

（8）臼田甚五郎校注・訳『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇〇年）、一三三頁。

（9）中西進『万葉集三』講談社文庫、二七五四番歌の注に「シノの音で接続。芽にシノフ目の寓意」とする。

（10）武田祐吉『記紀歌謡集全講』（明治書院、一九五六年）6と同じ。

（11）賀古明、前掲書、一一四頁。

（12）雄略記に見られる「志都歌」（記九一～九五、一〇三）のうち、記九三、一〇三は十一月節（新嘗・大嘗）の歌謡であり、「志都歌の歌返」とともに、十一月節で歌われる歌曲だったと思われる。

（13）西宮一民校注『古語拾遺』（岩波文庫、一九八五年）による。

（14）以下、貞観儀式の引用は『内裏儀式：内裏儀式疑義弁内裏式　儀式　北山抄』（増訂故実叢書第四、吉川弘文館、一九三〇年）による。

（15）延喜式では「造酒児井」とある。

（16）以下、延喜式の引用は『新訂増補国史大系（普及版）交替式・弘仁式・延喜式前編』（吉川弘文館、一九九五年）による。

（17）井口樹生、前掲論文、一三頁～一四頁。

（18）井口樹生氏は前掲論文において「稲井は地名であり、田に水を供給する井であると共に、聖水讃美の歌になっている」、「松井は地名でありながら、主基当国の御井を歌う内容になっている。これなど大嘗祭に用いられる水の、はるばる悠紀・主基の御井から運ばれた聖水であることを言う、神道的象徴を歌っているのではあるまいか」とする。

（19）訳注日本史料『延喜式上』（集英社、二〇〇〇年）、三九九

頁頭注。

※本稿における万葉集、日本書紀、古事記、風土記、催馬楽の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）による。

〔付記〕本稿は平成二十九年度上代文学会秋季大会における口頭発表をもとにしたものです。

（ふくはら　さちこ／本学大学院生）